

# 大学生にとっての「働くことの意味」に関する 探索的研究

小 川 邦 治

An Exploratory Study on “Meaning of Working”  
for University Students

Kuniharu Ogawa

## 問 題

キャリア教育の必要性や意義の理解が学校教育の中で高まってきており、実践の成果も徐々に上がっているとされる一方、キャリア教育に対する理解や実践内容・水準にばらつきがあるとされている（中央教育審議会，以下中教審，2011）。キャリア教育を進めていく上で重視されているのは「勤労観・職業観」の醸成であり、“生涯の中で必ず訪れるいくつかの転機に対処するためにも、また自ら積極的に選択して進むべき道を変更するためにも、こうした「勤労観・職業観」を形成する過程を経験しておく”ことが大切である（中教審，2011）。渡辺（2014）は、キャリアを“生涯を通して他者および社会と関係する中で得られる諸経験の価値づけ、意味づけで構成される個々人それぞれ独自の生き方の構築の過程”としており、キャリアデザインを形成するうえで様々な経験を価値づけたり意味づけたりすることはとても重要であると言える。本研究では大学生のキャリアデザインを考えていく上で重要な「働くことのイメージ」や「働くことの意味」を大学の授業で取り上げ、そこで得られたデータをKJ法（川喜田，1967，1970）による質的分析によって探索的に検討したので報告する。

## 研 究 1

### 目 的

大学1年生が「働く」ことに対してどのようなイメージを抱いているのかを探索的に検討する。

### 方 法

**調査対象者** 西南学院大学人間科学部心理学科1年生108名（男性26名、女性82名）のうち、基礎演習Ⅰ（3）の受講生26名中、当日参加した25名（男性3名、女性22名）。

**調査時期** 2015年6月。

**調査方法** 心理学科1年次配当科目である基礎演習Ⅰの「将来の仕事探し」の授業にて、『『働くことについてのイメージ』を一つずつ付箋に書き出す』という課題を出した。授業終了後に付箋をすべて回収し、質的分析の対象とした。なお、授業では「働く」ことに関する自己理解・相互理解を促進させるために、グループにわかれて自分の書き出したイメージについて語るセッションを複数回行った。

### 結 果

KJ法（川喜田，1967，1970）による質的分析を試みた。回収された付箋の数は77であった。すべての付箋の内容を確認し、一枚の付箋を1切片としてそのまま分析対象とした。まず一つ一つの切片の内容を吟味し、同じ語句や意味が近いものを同じコードにまとめていった。この作業において、「お金」「金」は同じコードとして扱った。また、「生活のために稼ぐ」「生活のために必要」は別のコードとした。コード化のプロセスは可逆的であり、最も整合性の高いと思われるコードにまとめられるまで繰り返した結果、21コードを得た。

次に、得られたコードの意味内容を吟味しながらより上位の概念にカテゴリー化していった結果、6つのカテゴリーを得た。カテゴリー生成の段階で【埋没する自己】には<人間関係>および<時間>の2つのサブカテゴリーを付加した。そして切片の多いものから順にまとめたのが表1である。この表において【 】がカテゴリー、< >がサブカテゴリー、その右に提示してある

表1 「働く」ことのイメージ (大学1年生)

カテゴリー		コード
【労苦】 (28)		「大変・きつい」 (13) 「だるい・辛い・しんどい」 (6) 「忙しい・じたばた」 (6) 「精神がすり減る」 (3)
【お金】 (18)		「お金を稼ぐ」 (14) 「お金がもらえる」 (2) 「生活のために稼ぐ」 (2)
【埋没する自己】 (13)	<時間> (7)	「自分の時間が減る」 (3) 「つまらなそう・マンネリ」 (3) 「暇つぶし」 (1)
	<人間関係> (6)	「上下関係・頭を下げる」 (4) 「機械の歯車」 (1) 「職場によって年齢が違う」 (1)
【生活の自立】 (8)		「生活のために必要・家族を養う」 (4) 「自立・独立」 (3) 「責任感」 (1)
【やりがい・生きがい】 (7)		「やりがい・生きがい」 (5) 「楽しい」 (2)
【社会貢献の萌芽】 (3)		「人の役に立つ」 (2) 「できることを生かす」 (1)

「 」がそのカテゴリーを生成したコードである。また ( ) の数字は切片数である。

## 考 察

研究1では、大学1年生を対象として「働く」ことのイメージについて質的研究法を用いて探索的に検討した。調査対象者は25名と少なく、また授業の一環として行われたものであることからデータの解釈は限定的なものとならざるを得ないが、大学1年生にとって「働く」ことがどのようなイメージなのかを探る上でいくつかの示唆をもたらすものと考ええる。

「働く」ことに対しては【労苦】のイメージが最も強く、【やりがい】や【社会貢献の萌芽】は少数であった。高橋(2005)によると、「働くこと」そのものは重層的な意味合いを持っており、その下位概念である「労働」には労苦、骨折りの活動というニュアンスが強く、「仕事」や「職業」にはそれ自体が喜

びともなり誇りともなりうるという意味合いが含まれているという。それに対して同じく「働く」ことの低位概念である「勤労」は心身を労して勤めに励むという日本特有の用語である、と指摘している。高橋（2005）の指摘に基づけば、今回得られた結果は【労苦】としての「労働」のイメージが色濃く反映されており、大学1年生においてはまだ「労働観」が重層的な意味を持ち得ていない可能性を示唆するものと考えらる。

杉本（2012）は、大学生を対象に就職することのイメージを自由記述で調査し、KJ法を用いて整理したところ、最も高かった就職イメージは“お金を稼ぐ”ということであり、順に“時間が縛られること”“自立するということ”“社会的な地位を確立すること”“社会的な責任”であった。本研究は「働く」をテーマにしているため、「就職」とは必ずしも一致しないが、本研究においても<お金を稼ぐ><生活のために稼ぐ><お金がもらえる>という【お金】に関するイメージは数多く報告された。

本研究では、働くことの持つ肯定的意味合いとしての【やりがい・生きがい】【社会貢献の萌芽】は少数であった。杉本（2012）は「就職」に対する学生特有のイメージとして“将来の自分の可能性が制限される”ということを指摘しているが、本研究では「制限される」イメージというよりも<時間>と<人間関係>の中で【埋没する自己】として語られた。調査対象はまだ大学生になって2か月しか経過していない1年生であり、働くことについてのイメージが具体的ではなかったり単純化されたものだったりすることはやむを得ないかもしれないが、入学して間もない大学生が「働く」ことに対してネガティブなイメージを抱いていることは、大学におけるキャリア教育を展開するうえで重要な示唆をもたらすと考える。すなわち、働くことに対してネガティブなイメージを抱いている初期の段階でキャリアデザインの重要性のみを強調したり、具体的な就職の方法についていくら良いアドバイスをしたりしても効果は限定的ではないかということである。たとえば初期のキャリアデザイン教育としては「働くことの意味」について否定的な側面だけでなく、肯定的・積極的な意味を見出したり考えたりできる手法を検討するべきではなかろうか。

では就職活動を控えた大学3年生や就職活動を経験した大学4年生は「働く

こと」についてどのようなイメージを持っているのだろうか。社会に出ることや働くことが身近に迫りつつある3、4年生にとって「なぜ働くのか」ということは大きな関心事の一つであろう。そこで、研究2では大学3、4年生にとっての「働くことの意味」について探索的に検討することとした。

## 研究 2

### 目 的

大学3、4年生が「働くことの意味」についてどのようなイメージを抱いているのかを探索的に検討する。なお、本研究は3、4年次配当科目である「産業カウンセリング心理学」の中に行い、「働くこと」から一歩進めて「働くことの意味」について問うこととした。

### 方 法

**調査対象者** 西南学院大学人間科学部心理学科にて開講している産業カウンセリング心理学受講生のうち、当日参加した86名（3年生50名（うち男性6名、女性44名）、4年生36名（うち男性10名、女性26名））。

**調査時期** 2015年9月。

**調査方法** 心理学科3、4年次配当科目である産業カウンセリング心理学にて、『人は何のために働くのか?』を思い浮かべて一つずつ付箋に書き出すという課題を出した。授業終了後に付箋をすべて回収し、質的分析の対象とした。なお、授業の中では3～7名のグループに分かれてグループ作業としてKJ法による分析を課し、グループ毎にコード化、カテゴリー化を行ってタイトルをつけ、それを発表した。

### 結 果

研究1と同様KJ法による質的分析を試みた。回収された付箋の数は444であった。まずすべての付箋の内容を吟味し、2つ以上の意味に分割できるものがないかを検討した。例えば1枚の付箋に「生きるため 自分のため」と書かれているものは2切片とした。その結果、新たに18の切片が得られたため、合わせて462切片を分析の対象とした。

次に、KJ法の手続きに従い、同じ語句や意味に近いものを同じコードにまとめ、この作業において、「お金」「金」は同じコードとして扱うなど、研究1と同じ基準でコード化を進めた。また、「きつそう」「働きたくない」「労働時間が長い」「体力を使う」「辛い」「一生懸命」「実力主義」は「働くことのイメージ」であって「働くことの目的」ではないと考えられるため、今回は分析対象外とした。その結果分析対象は454切片となった。コード化のプロセスは可逆的であり、最も整合性の高いと思われるコードにまとめられるまで繰り返した結果、55コードを得た。また、多くの切片が「〇〇のため」とされているがコード化の段階で意味を損なわない限りにおいて省略し、「〇〇」の部分をコードとした。たとえば「お金のため」は「お金」とした。また「趣味のため」は仕事を趣味とするのではなく、「仕事以外の趣味のために働く」という意味なので、「趣味のため」のままとした。

次に、得られたコードの意味内容を吟味しながらもっとも整合性の高くなるより上位の概念にカテゴリー化していった結果、6つのカテゴリーと21のサブカテゴリーを得た。これらのカテゴリー、サブカテゴリー、およびコードを示したものが表2である。

次にカテゴリー間の関係性を吟味しながら再文脈化を行い、カテゴリーの図示を試みた。再文脈化に当たっては、働くことの意味に関する先行研究（高橋，2005；尾高，1995；杉本，2012）を参考にしながら行った。カテゴリーのうち、【生計の維持】【個性の発揮】【役割の実現】は「職業とは個性の発揮、役割の実現および生計の維持をめざす継続的な人間活動である」という尾高（1995a, b）による職業の定義をもとに再文脈化した。そして最も整合性の高いと思われる配置となるように整理したものが図1のカテゴリー関連図である。

図1の左側には働くことに対して肯定的と考えられるもの、右側にはその反対に働くことに対して否定的と考えられるもの、または積極的な目的を見出していないと考えられるものを配置した。【生計の維持】と【役割の実現】は肯定的にも否定的にも意味を持ち得ると考えられるので、中央に配置した。先にも述べたように【生計の維持】【個性の発揮】【役割の実現】は、尾高（1995a,

表2 「働くことの意味」に関するカテゴリとコード (大学3、4年生)

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
【生計の維持】	<お金> (70)	「お金」(43) 「お金を稼ぐ」(15) 「生活費」(12)
	<生活・生きる> (58)	「生活」(21) 「生きる」(18) 「生活の安定・充実」(12) 「衣食住」(7)
	<自立のため> (9)	「自立」(6) 「ニートにならないため」(3)
	<人としての基本> (6)	「人間としての基本」(4) 「生活リズム」(2)
	<老後> (5)	「老後」(5)
	<未来> (4)	「未来・将来」(4)
【個性の発揮】	<(自己)成長> (34)	「(自己)成長」(18) 「人生経験」(10) 「能力向上」(4) 「社会勉強」(2)
	<充実感・やりがい> (25)	「充実感・達成感」(13) 「やりがい」(7) 「仕事自体が好き」(5)
	<自分探し・生きがい探し> (19)	「生きがいを見つける」(10) 「存在意義を得る」(5) 「自分探し」(4)
	<夢・目標の実現> (18)	「夢・目標の実現」(11) 「時間の有効活用」(5) 「能力発揮」(2)
	<関わり・出会い> (16)	「人と関わる」(9) 「人との出会い」(7)
【役割の実現】	<社会貢献> (44)	「社会貢献」(15) 「人の役に立つ」(14) 「社会」(10) 「人・仲間のため」(5)
	<家族・扶養> (31)	「家族」(18) 「養う」(11) 「親孝行」(2)
	<社会的認知> (22)	「社会的に認められる」(7) 「責任・使命」(5) 「地位・肩書」(5) 「社会の一員になる」(3) 「出世」(2)
【非個性化】	<世間体・風潮> (17)	「世間体」(9) 「風潮」(4) 「冷たい目避ける」(4)
	<義務・社会が回る> (17)	「義務」(7) 「社会が回る」(5) 「国・日本経済」(3) 「会社」(2)
	<暇つぶし> (14)	「暇つぶし・時間つぶし」(14)
【趣味・欲しいもの】	<趣味のため> (22)	「趣味のため」(16) 「好きなことをする」(3) 「遊ぶ」(3)
	<欲しいもの> (7)	「欲しいもののため」(5) 「欲のため」(2)
【自分】	<自分> (16)	「自分のため」(12)
	<幸せ> (4)	「幸せのため」(4)

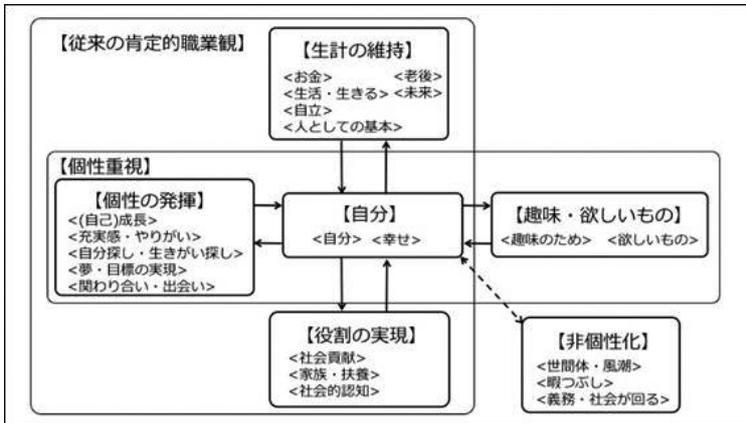


図1 「働くことの意味」カテゴリー関連図

b) による職業の定義に基づいて再文脈化されているため、この3カテゴリーに【自分】を加えた4カテゴリーをまとめて【従来の肯定的職業観】とした。

【個性の発揮】【自分】【趣味・欲しいもの】は働くことに対する動機づけや積極性の違いはあるがすべて自分らしさや個性を重視したカテゴリーであると考えられる。よって、この3カテゴリーをひとつにまとめて【個性重視】とした。

【非個性化】以外のカテゴリーはすべて【自分】に関連付けた。それぞれのカテゴリー間の関係については、本研究では【自分】を介して関連付けられるものとした。

【非個性化】は<世間体・風潮><暇つぶし><義務・社会が回る>から生成されたカテゴリーであり、【従来の肯定的職業観】にも【個性重視】にも位置付けることができない固有のカテゴリーと考えられた。少なくとも「働く」ことにおいて肯定的ではなく、強いて関連づけるとするならば、【自分】と相反したカテゴリーであると考えられる。しかし【非個性化】は自分を重視するが故に浮かんできたカテゴリーとも考えられるため、本研究では右側に配置し、【自分】との関係を破線の矢印によって示した。

## 考 察

大学3、4年生に対して「働くことの意味」を問い、得られた回答に対してKJ法による質的分析を行ったところ、【従来の肯定的職業観】と【個性重視】という大きな2つのカテゴリーを得た。【従来の肯定的職業観】とは、尾高(1995a, b)による生業としての【生計の維持】、転職としての【個性の発揮】、そして職分としての【役割の実現】であり、【個性重視】とは【個性の発揮】および【趣味・欲しいもの】からなる。働き方が多様化する現代において働くことの意味を希求する必要性が生じているという指摘(杉村, 2009)がある一方で、本研究の対象となった大学3、4年生がこのような【生計の維持】【役割の実現】【個性の発揮】という【従来の職業観】を多く挙げたことは大変興味深い。

本研究では仕事以外の【個性の重視】として「【趣味・欲しいもの】のために働く」というカテゴリーが生成された。高橋(2005)は日本人の伝統的な職業観の特徴として「労働の美德意識」「仕事中心主義的意識」「企業帰属意識の強さ」を挙げているが、本研究で示された【趣味・欲しいもの】のために働くという意味づけは、こうした伝統的職業観とは異なり、働くことそのものを自己実現の手段としてとらえる生き方とは一線を画すものである。むしろ“労働からの苦痛を正直に認めた上で、働くことは食べるための糧を得るための手段にすぎない、と開き直す”(橘木, 2009)価値観に通じるものと考えられる。橘木(2009)は“趣味やボランティア活動から得られる喜び、ないし満足の程度が最低限の労働から生じる苦痛よりも大きければ十分に人間として価値のある人生を送っていける”と指摘しているが、【趣味・欲しいもの】のためには労働から生じる苦痛もある程度我慢できる、ということなのかもしれない。

今回、【非個性化】としてカテゴリー化した<世間体・風潮><義務・社会が回る><暇つぶし>が全切片数の約1割を占めたことは筆者にとっては驚きであった。杉本(2012)は大学生の就職イメージとして“就職に対する拘束的イメージ”を挙げたが、この指摘に通じるイメージと重なるものは本研究では<義務・社会が回る>であり、<世間体・風潮><暇つぶし>については検討を要するだろう。

このうち、〈暇つぶし〉について解釈していく上では橋木（2009）の指摘が参考になるかもしれない。橋木（2009）は、“人が他人から承認を得たいために労働する”という今村（1998）の考えを引用しつつ、“最低限の労働を行い、余暇をどう過ごすかによって別の種類の喜びを感じることがありうる”とし、“労働から喜びを感じ得ることのできる仕事に従事している人であっても、長時間労働にコミットしてへとへとになるまで働く事をせずに、できるだけ労働時間を短くして、余暇の時間を多く求める生活があつてよい”と指摘する。本研究における〈暇つぶし〉はこの橋木（2009）の指摘に通じる視点が現れていると考えてよいのかもしれない。

個性重視の教育を受けてきたとされるゆとり教育世代が「〈世間体・風潮〉のために働く」ということを挙げたことについては、慎重に検討していく必要があるだろう。特に過去において働くことの意味の中に〈世間体・風潮〉がどれくらいの割合を占めていたのかを示すデータがないため、その意味内容をよく吟味する必要があるだろう。

シンクタンクの伊藤忠ファッションシステムは、1992年～1996年生まれを「LINE世代」と命名し、LINEをはじめとする主要SNSやデジタルツールをデフォルトとして享受していると指摘している（中村，2015）。本研究の対象はまさにこの世代であるため、今後検討を進めていく上での手がかりの一つとしてこの「LINE世代」という若者論を引用してみよう。LINE世代の特徴として“一挙手一投足が常に複数の他者の目にさらされ、LOG化されてしまうコミュニケーション環境が人間関係構築の初期設定となっている”ため、他人の目に対する意識が圧倒的に高まっている、という（中村，2015）。同様のことを岡田（2014）も指摘しており、LINE世代は“自分がグループからはみ出さない、もしはみ出しされてもなんとか生き残るような人間関係の空気を読む能力が異常に高”く、“自分が主張する前に‘全員がどういう主張をするようになるのか’”というのを読んで” コミュニケートしているという。もしもこうした若者論の文脈で今回の結果をとらえることができるのであれば、〈世間体・風潮〉のために働くということはLINE世代の示す“常に最大公約数的に受容される状態”（中村，2015）、すなわち〈世間体・風潮〉を維持しようとする

る若者の価値観を体現したものなのかも知れない。こうした若者論は極端な一般化や偏見に通じる可能性が高く、引用する場合には慎重になるべきだが、今後「働く意味」を実証的な心理学的研究の俎上に乗せていく上で重要な視点でもあると考える。

## 総合考察

森田（2014）は働くことの意味が現代においては多様化していると指摘するが、本研究では多様な意味が認められたというよりは従来の【労苦】（研究1）や【従来の肯定的職業観】（研究2）といった従来の仕事観に通じるものが多くみられた。一方で、＜時間＞と＜人間関係＞に【埋没する自己】（研究1）がみられたり、働くことの原因を【世間体・暇つぶし】とする（研究2）ように、従来の職業観に基づかないイメージも語られた。

冒頭にも述べたように、学校教育の中でキャリア教育の必要性はますます高まっており、その中で「勤労観・職業観」を醸成していくことはキャリア教育のもつ重要な側面のひとつである。そして、原（2014）も指摘するように「働くことへの意識（就業意識）」がしっかり高まっていけばそれがベースとなってその後の様々な支援がよりの確に機能していくことになるだろう。末廣（2014）は“働くことへの意味づけや意義を考えることは、自分の納得のいく働き方、生き方を実現するステップの重要な出発点”であり、“社会に船出していく若者にとっては重要で、そのための支援は不可欠である”としている。今回は基礎科目と専門科目の授業の一環として「働くことの意味」を検討したが、今後はキャリア教育の一環としても「働くことの意味」をとりあげていくことが重要であろう。

本研究では働くことの意味が特に大学低学年においてあまり良くないことが示唆された。したがって、大学低学年に対してはキャリア教育の入り口として「働くことの意味」をみつめたり、理解を深めたりする時間を確保することが大切であると考えられる。一方で大学高学年に対しては、【個性重視】の視点から、個々人の労働観を尊重しながら、最も適切であると思われる就労支援を

行っていくことが考えられる。世界でも例をみない新卒一括採用システムが我が国に存在する以上、どうしても就職活動については情報提供や面接訓練などのテクニカルな側面のみが脚光を浴びがちであるが、教育現場においては学生の持つキャリア発達課題に合わせた多様なキャリア教育が展開されてよいと考える。

なお、本研究は仮説生成型の質的研究であり、かつデータ収集した母集団がととも限られているため、今後は3つの方向で研究を進めていくことが望まれる。1つめは、質的データの充実によって分厚い記述（佐藤，2008）による質的研究を目指す方向である。これは、同様の手続きによってデータを収集するだけでなく、対象者に対する面接調査によって逐語データを収集したり、分析方法を再検討したりすることで検証に耐えうる仮説を生成するプロセスである。そのプロセスにおいては、調査実施者である筆者だけでなく調査対象者との接点のない専門家によって再文脈化を検討するべきである。2つめは、そうして得られた仮説を科学的に検証していく方向である。この点については、就職活動において学生の自己分析が慣行化（牧野，2010）する現在において、自己分析以外の指標を導入する可能性を示唆するものである。3つめは、得られた知見を実践の場で活用する方向である。本研究の成果は学術的視点からだけでなく、キャリア教育として実践することによって検証される必要があると考える。就職活動が本格化する前の段階で「働くことの意味」について検討し、理解することをキャリア教育の一環として展開し、その成果を検討していくことが望まれる。

## 謝辞

データ収集のために協力してくださった西南学院大学人間科学部心理学科の学生の皆さんに深く感謝いたします。

## 引用文献

中央教育審議会（2011）. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）

- 原 正紀 (2014). 働くことへの意味づけ・意義－職業倫理支援 2－ 日本キャリアデザイン学会 (監) キャリアデザイン支援ハンドブック ナカニシヤ出版 pp.152－155.
- 今村仁司 (1998). 近代の労働観 岩波新書
- 川喜田二郎 (1967). 発想法－創造性開発のために－ 中公新書
- 川喜田二郎 (1970). 続・発想法－KJ法の展開と応用－ 中公新書
- 牧野智和 (2010). 「就職用自己分析マニュアル」が求める自己とその機能－「自己のテクノロジー」という観点から－ 社会学論集, 61, 150－167.
- 森田慎一郎 (2014). 働くことの意味 日本キャリアデザイン学会 (監) キャリアデザイン支援ハンドブック ナカニシヤ出版 pp.71－72.
- 中村ゆい (2015). 最大公約数的状態をはみ出さないLINE世代 伊藤忠ファッションシステム株式会社 2015年2月28日<<https://www.ifs.co.jp/knowledge/最大公約数的状態をはみ出さないLINE世代/>> (2015年11月17日)
- 尾高邦雄 (1995a). 職業社会学序説1－職業とは何か－尾高邦雄選集1 職業社会学 夢想庵 pp.17－37.
- 尾高邦雄 (1995b). 職業社会学序説2－職業の3要素－尾高邦雄選集1 職業社会学 夢想庵 pp.39－54.
- 岡田斗司夫 (2014). 【レポート】LINEを使うゆとり世代におきた怖い進化ふりっくすなう！ 2014年3月26日<<http://blog.freeex.jp/archives/51417554.html>> (2015年11月17日)
- 佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法－原理 方法 実践－ 新曜社
- 末廣啓子 (2014). 働くことへの意味づけ・意義－職業倫理支援1－ 日本キャリアデザイン学会 (監) キャリアデザイン支援ハンドブック ナカニシヤ出版 pp.149－150.
- 杉本英晴 (2012). 大学生の就職に対するイメージの構造 キャリア教育研究, 31, 15－25.
- 杉村芳美 (2009). 人間にとって労働とは－「働くことは生きること」－ 橘

- 木俊詔（編）叢書働くということ 1 働くことの意味 ミネルヴァ書房  
pp. 30-56.
- 橘木俊詔（2009）. 働くということ－偉人はどう考えたか－ 橘木俊詔（編著）  
叢書働くということ 1 働くことの意味 ミネルヴァ書房 pp. 3-29.
- 高橋美保（2005）. 「働くこと」の意義についての研究の流れと今後の展望 東  
京大学大学院教育学研究科紀要, **45**, 149-157.
- 渡辺三枝子（2014）. キャリア 日本キャリアデザイン学会（監） キャリアデ  
ザイン支援ハンドブック ナカニシヤ出版 pp. 5-6.

西南学院大学人間科学部心理学科